

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 李 在鏞

論 文 題 目

室町時代から明治時代初期までの促音の表記に関する研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	釘貫 亨
委員	名古屋大学教授	齋藤文俊
委員	名古屋大学准教授	宮地朝子

## 論文審査の結果の要旨

### [本論文の概要]

本論文は、日本語音声において特殊拍に分類される促音（いわゆる「詰まる音」）の表記の歴史的成立の様相を、関連する文献を駆使しながら考証したものである。同じ特殊拍とされる撥音（いわゆる「はねる音」）と相違して促音表記「つ」は[tsu]と[Q]の二類の音を表記する点において単純ではない様相を呈する。

論者は、先ず序章において研究の目的を述べ、日本語文の右隅（縦書き）あるいは下隅（横書き）に「つ（ツ）」と小書きされる体裁が確立したのが1946年の内閣訓令「現代かなづかい」制定以後のことであるが、その過程の歴史的経緯を考察し、その意義を論じる意義を述べる。その背景として促音/Q/の日本語史上における成立を確認し、研究史を概観している。第1章において、論者は促音の小書き表記の嚆矢とも考えられている世阿弥自筆の謡曲本を観察対象にして、促音のほか/tu/の音、漢字音における入声音など多様な表記に用いられる「ツ」の実態を報告している。第2章では、朝鮮語音声の知識に触れた日本人が、朝鮮語における促音に似た子音が連続する「激音」や「濃音」を「ツ」によって表現する実態を報告している。かかる様相を詳細に記述することを通じて、促音を「ツ」表記に統一収束する過程を観察する契機とする。

第3章では江戸時代の漢学者にして対韓外交の専門家であった対馬藩士雨森芳洲の『全一道人』における朝鮮音の仮名表記の有様を観察する。日朝両語に精通した人物の音声表記の実態をより所にして、芳洲が駆使する「ツ」が音節末子音を表記する方法、激音や濃音を表記する方法に有効に機能したとする。これと併せて『全一道人』の仮名使用法が現在も十分解明されていない日本語促音の実態を考察する有力な資料となり得る可能性を展望している。

第4章において論者は、現代日本語表記の源流の一つと評価される新井白石『西洋紀聞』における平仮名文に観察される「つ」と異体表記「川」「徒」を含んだ使用法の違いを詳細に検討する。同書は、漢字平仮名交じり文を主体にして、外国語・外来語表記を片仮名で記す点において注目される文章スタイルを用いている。論者は、白石が平仮名文においておおむね伝統的な書記規範といえる仮名文字遣いを保持する一方で片仮名表記の部分においては促音を積極的に表記しようとする革新的な姿勢を持っていたことを主張している。

第5章では、近代的書記規範を確立しようと模索していた明治前半期の子ども向けの会話教科書に注目して、そこに表示されている促音表記の実態を報告している。論者は、伝統的な平仮名文の書記規範である仮名文字遣いでは表現することの出来ない特殊拍である促音表記が子どもへの理解を深める目的で平仮名文に導入され、ほぼ大書体の「ツ」に収斂する実態を明らかにする。結論として、明治7年から明治33年という近代文体確立の過程における子ども向けの文章の中で片仮名の「ツ」が促音表記として平仮名文の体系の中に取り込まれたことの表記史上の意義づけを提案する。

## 論文審査の結果の要旨

### [本論文の評価]

本研究は、室町時代以降から昭和 22 年の現代仮名遣い制定に至るまでの表記史の過程における日本語特殊拍の一つである促音表記にかかる変遷を丹念な文献考証と日本語音声に関する正確な知識を資源にして、「つ」に収斂する様相を記述した独創的な成果である。戦前までの平仮名書体における旧仮名遣いの促音表記は伝統的な仮名文字遣いの規範から離脱することを恐れて、小書きの「つ」表記は定着せず、「やつと」「きつと」のように専ら大書きされていた。留学生である論者は、かかる表記と実際の音声のずれに注目して、中世から近代に至るまでの促音表記の変遷過程を記述しようと試みた。その際、韓国語話者である論者が取った方法は、中世末から近世に掛けて残存する日本人の片仮名による朝鮮語音声表記の実態調査であった。この方法は、従来ごく一部の国語学者が試みた方法を踏襲したものであるが、本研究の特徴はその記述主体が韓国語話者による点である。その結果、本研究は日本語史研究に精確な韓国語に関する認識を注入した。本研究は、日本語文字表記史に関するものではあるが韓国語に関連する資料を用いているために結果として中世から近世に掛けての仮名文字を媒介にした対照言語学的観察を実現するもので貴重な報告ともなっている。従来、日本語表記史における特殊拍表記の問題は、個別文献あるいは個人に注目して取り上げられることが多く、研究が断片的に集積されてきた憾みがあった。本研究は、現代仮名遣い制定以前の促音表記に関する集大成的な性格を有する点に特徴が認められ、研究史上の課題が改善された。

また本研究が挙げた成果のうちでさらに注目されるのは、明治以後の子ども向けの会話教科書に関する観察であろう。ここでは、平仮名文の中に促音表記たる大書体片仮名の「ツ」が導入されてゆく過程が活写されている。平仮名文の中に促音表記「ツ」が出現する実態は、第二次大戦前の活字媒体においてしばしば観察されるところであるが、この点に関する社会的影響の拡大の実態に記述が及ばなかったのが惜まれる。

この点に関する問題として、世阿弥や新井白石等の第一級の知識人の書記実態を取り巻く社会的背景への言及が不足していることを指摘しておく必要がある。しかしながら、このような問題点はどれも今後の取り組みによって克服可能なものであり、本研究に関する重大な瑕疵とは言えないものである。

本研究は中世後期から明治前半期に至る日本語表記史の促音表記の実態に注目して、「つ(ツ)」に収斂してゆく実態を韓国朝鮮語資料からの視点を加味して通史的かつ総合的に観察した努力のたまものである。

以上のことから審査委員一同、本論文を博士(文学)の学位にふさわしい水準を備えた業績であると判断した。